

目的 着装によって生起する恥ずかしさ意識の構造を明らかにすると共に、女子学生とその母親世代で、恥ずかしさ意識にどのような違いがあるかを比較検討した。同時にこれらの恥ずかしさ意識と服装行動との関連についても検討した。

方法 調査項目は予備調査で得た恥ずかしさ尺度 20 項目、服装行動としてのおしゃれ意識尺度 15 項目、服装規範意識尺度 15 項目で、いずれも 5 段階評定で回答を求めた。調査は 159 名の女子学生とその母親世代を対象に、1998 年 12 月に集合法および配票留置法により実施した。分析方法は、恥ずかしさ意識については評定結果をもとに因子分析を行い、主因子をもとめた。次に世代間の差を見るため、女子学生と母親世代について恥ずかしさ意識や服装行動についての評定平均値を求め、T 検定をおこなった。さらに被験者の恥ずかしさの合計得点を求め、得点数の高低グループ間における服装行動の違いについても考察した。

結果 20 項目の恥ずかしさ尺度の評定結果をもとに因子分析した結果、気に入らない服装 (7 項目)、身体を強調した服装 (5 項目)、見苦しい服装 (7 項目) の主要な 3 因子が得られた。女子学生と母親世代間について、各調査項目の有意差を調べた結果恥ずかしさ意識については有意差のある 17 項目のうち、13 項目について母親世代が高い値を示した。一方、おしゃれ意識については 11 項目のうち 10 項目に女子学生が高い値を示したのに対し、服装規範意識では 10 項目すべてに母親が高い値を示した。また、恥ずかしさ意識の得点数の高いグループは低いグループに比べ、服装規範への同調が高い傾向が認められた。